

資料

ディックス, D.L. の生涯とその業績—II —ライフワークとの出会いからその死まで—

The Life and Work of Dorothea Lynde Dix—II

栗栖 瑛子

Eiko Kurisu

キーワード：ディックス, D. L., 人道的処遇, 精神障害者の権利擁護, 南北戦争陸軍看護婦総監督
日本への影響

Key words : Dorothea Lynde Dix, Moral Treatment, Advocacy for Psychiatric Patients
The Superintendent of Union Nurses in The American Civil War,
The Influence to Japan

I. ライフワークへ

ジルボーク, G. (Zilboorg, G. 1941) は、「南北戦争の最中、またその後の北米合衆国における Dix, D.L. (以下 Dix と略) の仕事は、精神病者の権利擁護に関する歴史上もっとも英雄的なもっとも有能かつ有益な革命の一つであった。(略) Dix は、全国を歩き回った。悪い道路、不順な天気、貧弱な交通機関、無愛想な政治家たち、けちな金持ち、官吏たちの自己満足、—こうしたすべての恐ろしく沢山の障害物も彼女にとっては未知の小石ぐらいにしか見えなかった。これを彼女は確信と信念の精力的な箒で払いのけ、休みなく続けた」と述べている。

本稿では Dix の活動を継時的に見ながら、彼女の死に至るまでの後半生を概観してゆきたいと思います。

資料としたのは、Tiffany, F. (1891)、

Schleichert, E. (1991)、Gollaher, D. (1995)、Brown, T. J. (1998)、Muckenhaupt, M. (2003)、Colmann, P. (2007) などです。

彼女は、ユニテリアン派の敬虔なキリスト教徒でした。宗教心が強く、優雅で控え目で物静かな物腰、地味な化粧と服装、意志の強さ、疲れを知らない活動と行動力、感情を表に出さず、頑固で芯が強く、蒸気船と乗合馬車や四輪馬車が交通手段であった 19 世紀末に秘書や同伴者もなく、一人で調査旅行をする豪胆さも併せ持った女性だったと言えるでしょう。彼女はパーティ好きではありませんでしたが、これと思った人には手紙を書き、積極的に友人となり、巧みな対話能力と女性性を活かして自分の考えを理解してもらおうとしました。

アメリカおよび世界各地を一人で旅行して精神医療施設、刑務所、救貧院、学校などの視察をしましたが、彼女の調査、問題発見の

手法は、なるべく対象の実態をありのままに把握しようとして予告なしに行う訪問調査と事例報告を併合した方法でした。厳密に統計を取ってその実態を明らかにすることはしていません。そして、観察してきた実態を記録にまとめて報告書にし、それを州議会や合衆国議会に請願書（Memorial）として協力者である州および合衆国議会の議員を介して提出する、という形をとっていました。

では、Dixの後半生の仕事を追ってゆくことにしましょう。

1. ライフワークとの出会い

前稿でも述べたように1837年、体調を取り戻してイギリスから帰国した35歳のDixは、ゆとりある生活が営める状況でしたが、独立して家を構えず、旅行をし、友人の家に止宿する生活を1839年夏まで続け、ようやくボストンのSarah Gibbs（William Ellery Channingの義理の姉妹）の家に落ち着きました。彼女は「ようやく寛げる家に落ち着くことができた」と親友のAnne Heathに書き送っています。彼女は生涯を通して、結婚し、自分の家庭を持つことはありませんでした。

1841年3月、ハーバード大神学部学生James T.G. Nicholeは、東ケンブリッジのミドルセックス郡女子矯正収容所の日曜学校の教師である自分の代わりに務めてくれる人はいないかと母親に相談したところ、Dixに相談するように勧められて、Dixを訪ねてきました。

Dixは彼の話聞いたのち即座に自分が引き受けようと返事をして、1841年3月28日東ケンブリッジの女子矯正刑務所の日曜学校へ赴き、何事もなく授業を終えたあと、庭を横切って、州法で収監されている囚人の部屋を訪れました。州法では興奮状態でなければ精神発達遅滞や、精神障害の人々には適切な部屋が与えられるはずになっていたのですが、彼女が目にしたのは、ニューイングランドの

湿って冷たい春の気候にも拘わらず、火の気のない小部屋に垢にまみれ、わずかな布や襪をまとった大勢の人々が蹲っている光景でした。

彼女は看守に火を焚くように頼みますと彼は、「火は危ないし本当に必要ない」と答えました。そこで、彼女は東ミドルセックス裁判所に暖房を入れてもらえるよう請願書を提出し、幸いにもこの頼みは受け入れられました。James T.G. Nicholeは、これを「彼女の偉大な仕事の始まり」といっています。

この訴えの成功はDixを勇気付け、刑務所の日曜学校の教師を続けながら、生徒のために宗教書を送り、公的な施設に牧師を配置し礼拝ができるよう配慮しました。

精神科医のJarvisは、精神障害者に対する「人道的処遇（moral treatment）」は、当時行われていた催吐薬、強い緩下剤、モルヒネなどを含む強力な危険な薬物を使い患者に疲労や消耗をもたらす「生物学的治療（heroic治療）」に比べ、「人道的処遇」は、自己統制力を養い患者を助けることが出来ること、その利点を述べていました。患者を病院にとどめ、日々の日課や趣味仕事などを行って、穏やかで整った環境と仕事と規律ある生活を行う考えが、次第に広まってゆきました。

2. アメリカにおける活動開始

Dixの活動を大きく3つの時期に分けて見ることができると思います。

1) 1841年から1845年まで

Howe, S.G.と彼の友人Summer, C., Water, R.C.らがDixのよき協力者となっていきました。

1842年6月、DixはHowe, S.G.とともにマサチューセッツ州における精神障害者の処遇改善の活動を始めました。1830年代を通じて、マサチューセッツ州では身寄りのない人や援助の必要な人々を収容する救貧院が建設され、救貧院には、慢性の精神的・身体的疾患、肢

体不自由者、孤児、老人、失業者などが収容されるようになりました。産業化が進み、ニューイングランドの人々が、収入の道を農場から工場に移した時期です。女性は家事をする代わりに学校や織物工場で働くようになり、伝統的な家族や共同体は社会的安全弁の役割を失ってゆきました。町は、新しい施設を作って家族や共同体の再統合を図ろうとしていたのです。Dixは、救貧院や刑務所の入所者数を数え、身体的、精神的健康状態を系統的に調べはじめました。また、牧師が週何回訪問しているか、日曜学校があるかについても調べ、この結果をHowe, S.G.に伝え、1842年9月8日にHowe, S.G.はボストンDaily Advertiser紙に東ケンブリッジの精神障害者の処遇は「キリスト教社会におけるもっとも恥ずべきもの」という記事を投稿しました。刑務所の医師はHowe, S.G.の指摘を否定し、反論をAdvertiser紙にのせました。翌日Dixは、ボストンのEvening Mercantile Journal紙に東ケンブリッジの施設の状態はマサチューセッツの他の刑務所に比べればまだまだましな状態である、その悲惨な状態を明らかに出来るとHowe, S.G.を支持する記事を書きました。

12月までにケープコッドの海岸からバークシャーの山岳地方までを旅し、1週間の間に35の町を訪れ、さらに、ノバスコシアからニューオルレアズまで、調査とキャンペーン活動を行いました。

1843年11月にはボストンを発ってロングアイランドからニューヨーク、ニュージャージー、フィラデルフィア、ハリスバーグ、ボルティモア、ピッツバーグ、10月にはシンシナティ、11月にはケンタッキー州内を一巡、この3年間の旅行距離は約10,000マイルに達しました。

Dixがマサチューセッツ州の各施設の調査を行っている間にHowe, S.G.は、州議会議員となります。Howe, S.G.の勧めでDixは州議会に請願書(Memorial)を書き、1843年1

月19日、Howe, S.G.は、これを州議会に提出します。新しい精神病院の建設というDixの願いは聞き入れられず、議会はWorcester精神病院を150床から400床に増やすことでこの問題に決着をつけました。

マサチューセッツ州ウォーセスター精神病院(Worcester Asylum)を拡張した他に、ロードアイランド県のバトラー精神病院(Butler Asylum)を再建、そのほか、トレントン精神病院(Trenton Asylum)、ハリスバーグ精神病院(Harrisburg Asylum)、ニューヨーク・ウティカ精神病院(Utica NY Asylum)を2倍に拡張、この他にも東カナダの監獄と救貧院の改革を行いました。

2) 1845年-1854年

Dixの活動範囲はさらに拡大します。インディアナ、イリノイ、ケンタッキー、テネシー、ミズーリー、ミシシッピ、ルイジアナ、アラバマ、サウスカロライナ、ノースカロライナ、メリランドを訪問、英領ノバスコシアのハリファックスおよびニューファンドランドのセントジョンに精神病院を新設しました。

1845年1月23日、ニュージャージー州議会に州立病院の設立を建議、1845年3月12日に州議会を通過、承認されます。トレントンのペンシルバニア州立精神病院(後に、トレントン精神病院と改称、Dixは「私の最初の子」と呼んでことのほかこの病院に愛着を示していました)の設立に貢献しました。

3) ロビーイストとしての活動

Dixの活動は、州から国単位に広がり始めました。1848年、合衆国国土省(General Land Office)は、10億エーカーの土地を所有していることを明らかにしました。国はこのうちの16分の1を公立学校建設用地として留保していました。このことを知ったDixは、5,000,000エーカーの国有地を各州に分け、州はそれを売却し、公立精神病院を設置するための基金にしたらいのではないかと考えま

した。

そのために、国有地払い下げ法案 (Land Grant Bill) を合衆国議会に提出し、法案の採択についてロビー活動をはじめました。ただ、Dixの計画は、北部の州に有利になるという問題がありました。

1848年6月23日、合衆国議会に5,000,000エーカーの国有地を払い下げるための建白書を提出。

1850年、合衆国議会に12,225,000エーカーの国有地払い下げ法案を提出します。それは下院を通過しましたが、上院で却下されました。

1854年、上述の法案を再提出します。幸い、合衆国議会の上・下院を通過しました。しかし、1854年5月3日 ピアース大統領は、この法案を却下します。Dixの法案を却下した理由として、大統領は「精神病患者だけが援助を必要としているわけではない」と述べたといわれています。

法案の承認を期待していたDixは、これまでの6年間の努力が実らなかったこと到大変ショックを受け、失望します。彼女は友人の議員たちに却下を取り消すように働きかけますが、大統領の拒否を覆すことはできませんでした。新聞は、法案はDixの女性としての真の慈善心から出たものである (Whigg派のBaltimore American) というものから、変わった老女の編み棒の中からたまたま生まれた考えに過ぎず、他に何か意図がある、とするものまで (バージニアのRichmond Enquirer)、多様な反応を示しました。

1854年6月6日議論の末、上院は27対24で大統領の拒否を支持することになりました。Dixは負けたのです。

Dixは、熟慮の末に、アメリカでの活動を一時中断して、イギリスを再び訪れることに決めました。

Ⅱ. イギリスをはじめ世界各地の精神障害者の施設等の視察へ (1854年10月-1856年9月) (図1)

法案がピアース大統領によって却下されて、Dixはがっかりし、敗北感を味わいますが、活動の意欲は変わらず、ヨーロッパの観光旅行を名目にして、1854年9月初旬、イギリスのリバプールへ向いました。

一介の女性教師の病氣療養のための20年前の旅行とは異なり、慈善家、精神医療の改革者、ロビーイストとして名声を得た女性の旅となりました。Dixの名声に船会社は船賃を無料にして、彼女に敬意を表しました。船旅の間も彼女は募金活動をし続けました。

1854年10月リバプール近郊のRathbone家に落ち着きました。Rathbone家の人々やTuke家の人々は、Dixの訪問を大いに歓迎してくれたのですが、Drowne, W.A.F. (Crichton Royal Institution, 精神病治療についてヨーロッパで優れた精神科医の一人) は、「アメリカからの侵入者」とDixを呼び、拒否的な態度をあらわにしました。

観光旅行と言いながら、彼女は出発前に既に多くの著名人宛の紹介状を手に入れ、視察の計画をしていました。

まずスコットランドの視察から行動を開始しました。イングランドでは、各郡に公立の精神病院が建設され、それを監督するための法律が検討中でしたから、この状況を勘案して、まだ影響の少ないスコットランドへの視察を優先したのです。

約2年間、Dixはどのようにヨーロッパを旅したのでしょうか。

図1は、2年間のヨーロッパ旅行の彼女の行程を地図上にあらわし、内容の概略を示したものです。この図からいくつかのことが読み取れます。

第一に、ヨーロッパ全土に及ぶ彼女の行動範囲の広さに目を奪われます。飛行機や新幹



- | | | | |
|---------------|--|--------------|---|
| 1854.9. | 表向き休息と観光→各国の施設の視察、リバプールへ | ⑨ 1856.3. | ベニス→コンスタンチノーブル（現イスタンブール） |
| ① 1854.10. | アイルランドへ | ⑩ 1856.4.10. | ボスボラス海峡を渡り、コンスタンチノーブルの北ペラに上陸→スクタリ（コンスタンチノーブルの一部）の陸軍病院へ |
| | スコットランド、エジンバラ→パース→ダンディ→モンローズ（Montrose）→アバディーン→エディンバラ | ⑪ 1856.4.22. | 黒海を渡り、ダニユーブ川を遡って、ウィーンへ。モルタビア、ヴァラキア（現ルーマニアの一部）、セルビアへ |
| ② 1855.春 | Daniel Hack Tuke と <u>ヨーク救護所</u> （York Retreat）で過ごす | ⑫ 1856.5.1. | ベオグラード、ドレスデン、Gounesteria、Hubersenberg、ライプツヒヒ、Stetteria、Halle、ベルリン（マルチン・ルター <small>の</small> 巡礼地とされる Wittenberg へ行くため遠回りをする） |
| ③ 1855.6.-10. | Rathbone らの誘いで、アントワープ→コペンハーゲン→ライン下りを楽しみ→ハイデルベルグ→バーゼル→アルプスへ観光旅行、Rathbone らと共にリバプールへ戻る | ⑬ 1856.7. | スウェーデンのウプサラ、オランダのロッテルダムとユトレヒト、ベルギーの <u>ゲールコロニー</u> を訪問 |
| ④ 1855.10.末 | Joseph Parrish（フィラデルフィアの医師）夫妻とパリへ | ⑭ 1856.8.中旬 | ロンドンへ戻る。再びナイチンゲールへの面会を計画 |
| ⑤ 1855.11. | パリ、 <u>ピセートル</u> 、 <u>サルベトリエール</u> 病院、国立シャラント病院を視察 | | この間、ブリストル、フランスのルーアン、オルレアンスプロア、ツール、ナントの青少年犯罪者矯正施設を視察、再びサルベトリエール病院へ |
| ⑥ 1856.1. | ナポリへ、精神病院を視察 | ⑮ 1856.9.5. | イギリスへ戻る。オックスフォード、バーミンガムの施設視察 |
| ⑦ 1856.2. | ローマへ。ローマ法王 Pius IX 世に謁見。2回目の謁見で、新しい精神病院の建設を約束させる | ⑯ 1856.9.7. | ナイチンゲールとの面会果たせず。 |
| | 古い Santo Spirito 病院を視察 | 1856.9.17. | アメリカへ帰国の船に乗る。 |
| ⑧ | フローレンス、ジェノバ、トリノで施設視察。オーストリア、ドイツ、オランダへ行く予定を変更、トルコへ | | |

図1 ディックス（Dix D.L.）のヨーロッパ旅行の行程

線や自動車が使える現代とは異なり、鉄道も十分に敷設されていない時代、旅の多くは、蒸気船や四輪馬車、乗合馬車に頼る時代です。さらに、言語的に英語以外はほとんど話せないにもかかわらず、勇敢にもアメリカ本土の視察旅行と同じく一人旅をやってのけています。彼女の知名度が上がるにつれて難しくはなってきたものの、実態を知るには先方に準備の余地を与えず、予約なしで訪問する方法は一貫してとり続けた彼女の視察の方法でした。友人は旅行中の事故などを心配して同伴者と旅することを勧めましたが、全く聞き入れませんでした。

第二に、当時すでに精神病院の改革が行われて、人道的処遇はヨーロッパで知られるところとなっていました。アンダーラインを引いた発祥の後であるフランスのピセートル病院をはじめサルペトリエール病院、イギリスのヨークトリート（ヨーク救護所）、ベルギーのゲールなどの先駆的な施設を漏らさず訪ねていることです。

Dixは、精神障害者の里親下宿制度として知られるベルギーのゲールコロニーに関心を持ち、このような施設がニューヨークにも出来たらいいともらしていた、ともいわれています。彼女は単に新しい病院を建設するだけでなく、地域の中で精神障害者が生活できる方法を考えていたのかもしれませんが。

第三に、計画通りにならなかったのですが、予定を変更してまで、トルコのコンスタンチノーブル（現イスタンブール）のスクタリの野戦病院を訪ね、イギリスにもどってから帰国直前まで、ナイチンゲールとの面会を望んだことです。

運悪く2度ともナイチンゲールには会えませんでした。Dixはなぜそれほどまでにナイチンゲールに会いたかったのでしょうか。

丁度そのころパリでは、クリミア戦争終結の講和会議が英・仏・トルコと露の間で開かれようとしていました。ナイチンゲールはク

リミア戦争における傷病兵の看護で「白衣の天使」として一躍名声を博していました。Dixもまたアメリカのナイチンゲールと目され、彼女もナイチンゲールになりたかったのではないかと考えられるのですが、それほど単純なものだったのでしょうか。

Dixは、アメリカ全土に巻き起こっていた奴隷制廃止に関する南北諸州間の政治的対立が激しくなっていたことを旅行中も知っていたと思われます。そして、スクタリの野戦病院の視察ではナイチンゲールには会えなくても病院内を回り、清潔で、換気がよく、整然とした管理がされていることを納得して帰っています。Dixの頭の中には、ナイチンゲールの「女性による陸軍病院の看護（1858）」や「看護覚書き（1860）」の著作があったのかもしれないと筆者は推測します。

Dixがナイチンゲールを尊敬していたと思われるもう一つの証は、統計学者としてのナイチンゲールを認めていた、ことではないかと思えます。南北戦争（1861-65）が勃発した時に、ナイチンゲールの実行範例が米国陸軍省によって英国陸軍の統計様式がそのまま継承され採択されていました。ナイチンゲールは、時の合衆国陸軍看護婦総監督のDixに、1857年の王立衛生委員会で証言した資料を送り、これがアメリカ北部諸州の軍隊管理に関する指針となりました。このことから、1874年10月16日、ナイチンゲールは米国統計協会の名誉会員に推薦され、これに対して、名誉会員の受諾と感謝を表し、アメリカ統計協会図書館に当時最新のレポート「インドにおける生と死」を送っています（多尾、1991）。

2年に及ぶヨーロッパ旅行を終えて、1856年9月16日リバプールを出港、帰国の途に付きます。

Ⅲ. 南北戦争へ、連合軍看護婦総監督に就任

Dixがヨーロッパの精神医療施設の視察をしている間に、アメリカは奴隷制をめぐる南北の諸州の対立が頂点に達していました。彼女は奴隷制についてはある程度距離を保っていました。

1856年帰国後は、イギリスへ行く前と同様に、各州を回り、精神病院や、精神発達遅滞児のための募金活動を行っていましたが、南北戦争が勃発すると、1861年4月19日、Dixはホワイトハウスを訪れ、連合軍の看護婦として先頭に立って働きたいと申し出、2日後にこれが許可されます。その頃すでに彼女はナイチンゲールと比較され、アメリカの女主人公になろうとしていたのでしょうか。

1861年4月21日、陸軍長官（Secretary of War）Simon Cameron、軍医総監（surgeon general）とRobert C. Woodと相談してDixの仕事は看護婦の募集と選考と配置、物資の調達などを行うこととなりました。Woodは、Dixに2日の間に500人分の病衣を集めよ、と無理な指示を与えます。彼女は一生懸命努力しますが、結局すべて自費で調達することになりました。

1861年4月26日にニューヨークでアメリカの医学校を出た最初の女性医師のElizabeth Blackwell、妹のEmily Blackwell、医師、Maria Zakarzewska（ドイツからの移民で医師）らによって女性中央救援協会（WCAR）が結成されました。女性中央救援協会は戦いのために女性看護婦を組織するように要請します。この女性たちは、若く、活動的な女性たちで、Dixの世代の女性とは異なり、家庭の外で働く訓練をうけており、多くは、Elizabeth Blackwellの看護婦教育プログラムに参加していました。WCARは、メキシコとの戦争の経験から、兵士を病気から

守る必要があると衛生委員会を作るように求め、承認されます。看護婦総監督と衛生委員会という二つの組織は、最初からしっくりいかなかったようです。

その主な理由は、Dixが示した志願看護婦の採用基準とDixと医師、事務官、看護婦らとの対人関係に絡む対立でした。Dixの示した採用基準は、1) 35歳から50歳まで、2) 十人並みの容姿、3) 心身とも強健で慢性疾患がないこと、4) 母親の経験があること、5) 高い教育を受けていること、6) 素行がよく、素直で勤勉、真面目で清潔を守り、整理整頓ができること、7) 衣服は目立たないもの、色は黒、茶、灰色を着用、8) 3か月以上勤められること、などでした。今日でもこれをクリアできる人はそれほど多くないかもしれません。Dixの厳しい側面が垣間見えます。

医師や看護婦との対立は、採用基準に絡むもののほかに、勤務中絶えずDixの厳しい監督の眼が光っていたことにもあったようです。彼女の指示は一般的でなく、また要求は非現実的なものがあるとの批判があったのです。医師たちは醜い人たちに囲まれて仕事をするのか、とか、「ドラゴンDix」は可愛い看護婦を働かせない、と選考に漏れた女性が語った、とかささやかれるものでした。1863年看護師の採用や配置は軍医総監が決め、看護婦総監督（Dix）にその結果を報告しなくても良いとする看護婦総監督の権限の一部を取り上げる決定がされたのです。Dixは誇りを傷つけられて辞職するのではと思われましたが、「私にはまだなすべきことがある」と戦争終了まで、看護婦総監督の地位にとどまり、自分に与えられた仕事をこなしました。

陸軍はDixの働きに対して謝意を表するのにDixの希望をききましたが、彼女はアメリカ国旗が欲しい、とだけ答えました。3年後Sherman将軍は、議会からの感謝のしるしとして特製の旗スタンドを送りました。この

ような栄誉をうけたのはDixが最初でした。

1865年6月17日、南北戦争終結とともに、看護総監督を辞職します。

Ⅳ. 再びアメリカの精神病院の改革へ

1865年11月ボストンにもどり、突然Anne Heathの家を訪れたDixは、「見るからにやつれ果てていた」とGrace Heathは記しています。

1867年夏、Anne Heathの従妹がなくなったのを機会に、Dixはニューヨークへ非治療的な病院の建設阻止のために出かけます。

1867年65歳のDixは南部への調査旅行を再開しました。ペンシルバニアに3つめの病院を建設（祖父の名を冠したDixmont 病院）、南カロライナの病院を復興します。その他にテネシー、オハイオ、ケンタッキーなどに病院建設に尽力します。

1869年大陸横断鉄道がニューヨークからカリフォルニアまで完成したのを機に、Dixはカリフォルニアへ出発します。カリフォルニアから帰って数か月後、重症のマラリアを発症し、死線をさまよった末に回復。医師の忠告で活動のペースを落としますが、視察旅行を続けます。徐々に行動のペースは下がってゆきました。

1881年10月ニュージャージー州立精神病院（トレントン精神病院）にたどり着きますがマラリアが再発していました。John Ward 院長とDixの支持者たちが病院の理事会に掛け合い、病院は、Dixに必要な限り医療と生活の便宜を与えることを許可しました。ここで5年間、時々の痛みに苦しみながら療養生活を送りました。体力の衰えとともに、視力と聴力はおとろえていきましたが、彼女は「私はベッドについていても、まだ何かできる」と信じていました。後半生の間にアメリカの各地を回り、32の精神病院の新設と増設に尽力しました。

1887年6月17日、85歳の生涯を閉じました。

マサチューセッツ、ケンブリッジのMount Auburn墓地のHorece Mann, Samuel Gridly Howe、William Ellery Channingらが眠る墓の近くに埋葬されました。

南北戦争以後の彼女の活動のなかで触れておきたい事柄を次に取り上げたいと思います。

1) Elizabeth Packard (1816-1897) との対立

Packard, E.は牧師と結婚し、6人の子供をもうけましたが、夫の独断的宗教観に納得できず夫婦間に軋轢が生まれました。さらに子供の養育や家計にも意見の不一致を見るようになり、1860年夫はPackardが「軽度の精神異常」と判断して、ミシンのセールスマンを装った医師に診せ、精神病院に彼女の同意なく入院させてしまいました。3年間ジャクソンビルのジャクソンビル精神病院に入院し、定期的な診察を受け、その後彼女は病気ではないことを主張し、Kankakee市のStarr判事による陪審員裁判で、誤った入院であったとして彼女は退院しました。家に戻ると夫は、家を他人に貸し、家具や彼女の私物や金銭をとりあげ、州から出て行きました。

イリノイ州では1867年、個人の自由保護に関する法律（Bill for the Protection of Personal Liberty）で精神病とされたすべての人（妻を含む）は公的な聴取を受ける権利を持つこと、を承認していました。つまり、1) いかなる人もおかしなことを言ってもそのことだけで精神障害または偏執狂（Monomaniac）とみなして扱ってはならない。2) 行動の異常を除き、非理性的で非道徳的な存在として扱わないこと、でした。イリノイ州以外の3つの州でも同様な法律が制定されました。

DixとPackardとが対立した問題は、Packardの「精神病院に安全な郵便受けを設置せよ」という法案の制定を合衆国州議会に求めたことでした。Packardは、Dixとは異

なり、強い女性でDixを脅かす存在に見えました。ワシントンで、この法案制定に向けて署名を集めたり、合衆国議会下院の郵政委員会で話をしたりしていました。Dixはこの法案の阻止を狙ってロビー活動を行い、この法案を廃案にすることに成功しました。

現在の考えからすれば、通信面会の自由は患者の権利として当然認められていることですが、当時のDixにはそこまで考えが及ばなかったのかもしれませんが。

Packardは1863年から1897年に亡くなるまで、既婚女性と精神病院入院患者の権利を守る改革を行いました。彼女はイリノイ州に留まらず、アメリカ全土を旅行し、女性の権利擁護に活躍したのです。

2) 森有礼とDix、京都府立癲狂院

日本の外交官としてワシントンに駐在していた森有礼が、帰国して数年後に京都に精神病院を作ることができたと伝えたことから、Dixの十字軍的活動は、日本にまで及んだと、73歳のDixは喜んだといわれています(Wilson, D.C. (1975)、Colman, P. (1992)、Gollaher, D. (1995))。

日本における近代的な公立精神病院第一号は、京都府立癲狂院で(明治4年、1871)、この病院の設立にDixの影響が及んでいたとされています(小峯, 1999; 石井, 1969; 小俣, 2000)。その根拠として挙げられているのが、以下にあげた森有礼からDix宛てた手紙です。森は次のように述べています。

「余が親愛なるディックス嬢、久しく通信不申上、御身が深き心にいます事業に関して、なおざりにせしと思召すこと勿れ、私事、その後多くの日時と注意とを、この問題に注ぎ終に京都にて一つの癲癲病院を、首尾よく設立いたし、今また東京にて、さらに一つ、設立中に有之、遠からず、この善事のために、開かるべしと存じ候、此外、尚、追て設立可致、願わくば、多くの不幸者を、せめて少し

にでも、減ずるの便りとならんことをと、熱望いたし居り候。1875年(明治8年)11月23日、日本東京にて 森有礼」

「京都の癲癲病院」は、京都府立癲狂院の設立の日時と合致するので、森がこの病院の設立に尽力したと考えられています。Dixは、73歳で、マラリア後の療養生活を送っていたところで、自分の考えが遠い日本の人々へも伝わっていると大変喜んで、誇りにしていた、ということです。

森有礼(1847-1889)は、薩摩藩士、外交官、政治家で、一橋大学の創設者、初代文部大臣、明六社会長、東京学士会初代会員として知られている人です。1860年ごろから薩摩藩藩校造士館に入学(12歳)、漢学を学んだ後、1864年(18歳)藩の洋学校開成所に入学、1865年藩の将来の人材育成を目的にした留学生派遣政策のもと、五代友厚らとともに、イギリスに密航した16人の若者の一人です。

森は明治維新後1868年に帰国。1870年少弁務使として1871年ワシントンに駐在、コネチカット、マサチューセッツなどの学校を視察、学者、政治家との交友を結び、1872年中弁務使になり代理公使となりました(Dix 70歳ごろ)。1872年(明治5年)には岩倉使節団を出迎え、使節団の大統領謁見式にも参列し、1873年アメリカより帰国、外務大臣となりました。

森有礼とDixが出会う機会は、彼がアメリカ在勤中の1871年から1873年までの間と考えられます。小野(1994)は、京都府立癲狂院は明石博高の建議で設立されたといっています。森と明石との間に病院設立の話合いがされたという実証的な資料が必要になりますが見出されていません。また、明石は、岩倉具視の命によって大阪に病院(後の大阪帝国大学医学部)や京都府療病院や医学校を建てていますが、京都府立癲狂院設立については述べておらず、森が明石を動かして京都府

立癲狂院を作ったとする記述は今のところ見当たらないとしています。浦野（1982）はDixと森の面識は認められるとしても森-京都府立癲狂院との関係を明らかにする実証的資料の裏付けが必要であるとしています。佐々木（2004）は、京都府癲狂院の設立に明石博高が関係しているとし、明石厚明著「明石博高」には京都府立癲狂院設立に関連する森との記述は認められないが、大阪病院や京都府療病院の設立が岩倉具視の指図であり、明石も岩倉に相談していたことが述べられていること、岩倉と明石との関係が密接であること、岩倉と森との関係は森が岩倉使節団に関与していた歴史的事実があることなどから、京都府癲狂院設立には、Dix-森-岩倉具視-明石博高という関係が成立する、としています（佐々木, 2004）、しかし、Dix-森-京都府立癲狂院との関連には、今一つ実証的な資料が必要であると筆者も考えます。

V. 没後の評価

Dixは長い間忘れられた存在でした。しかし、彼女の業績を称えて、1983年（Shampo, M.A. & Kyle, R.A., 1988）と1987年に死後百年を記念して、記念切手（Haas, L.F., 1994）が発行されました。

Rolka, G.M. (1994) は、史上最高の女性ベスト100人の一人にDixを選んでいました。

また、St. Elizabeth病院（1855年にDixの努力によって設立）は、設立150周年を記念して、アメリカ精神医学会は物故名誉会員としての称号を贈り、彼女の精神医療の改革に尽力した功績を称え、Dixが目指した、「精神障害者に対する最善の人道的処遇と有効かつ強力な正しい治療法を開発するという仕事」は、今日も尚われわれが目指すべき目標であると述べています（Gold, L.H., 2005）。

Dix, D.L.は、生前から自伝を書くことを拒

否し、死後も彼女にまつわる資料を破棄するように遺言していた（Tiffany, F., 1891）といわれていました。その後関連資料がハーバード大学図書館に寄贈されるようになって、Colman, P. (1992) をはじめとして、少しずつ彼女の伝記が書かれるようになっていきます（Reik, L.F., 1952 ; Norbury, F.B., 1988）。Dixの生涯は、決して生易しいものではありませんでした。ビクトリア朝の女性の慎み深さがあったとしても、女性の社会的地位が低かった時代、彼女は様々な非難や中傷を浴びつつ貧しい精神障害者の処遇改善に尽力した先駆的改革者でありました。生前男性たちは、彼女を決して「改革者」とは呼ばず「女性の改革者」と呼んでいました。彼女の努力で建設された新しい精神病院は、やがて巨大化し、精神病者の入院が長期化することになりました。彼女の後に続く、新しい改革者たちが出現します。先に述べたPackard, E.もその一人でしたが、Clifford H. Beers (1876-1943) もその一人です。彼は、精神病で入院した経験から看護の質、治療環境の劣悪さを問題にした「わが魂に会うまで」(1908) を著して、精神処遇の改善を訴え、彼の考えに賛同する精神科医らとともに、コネチカット精神衛生委員会を設立し、これが今日の世界精神保健連盟の基礎となったのです。1950年代から抗精神病薬の開発が進み、精神病の治療は病院医療から大きく地域医療へと変化してきています。

Dixが今の時代に生きていたら多くのアイデアを持って活躍したかもしれません。精神障害に苦しむ人々の問題は消滅したわけではなく、形を変えて質を変えて、今もなお多くの人々を苦しめ、いまだに精神病への偏見に悩まされています。

今でも、精神障害者の権利擁護とケアの改善に努力し、声なき声を代弁する仕事私たちが看護師の義務の一つとして与えられているのです（Stuart, G.W., 2013）。Dixの勇気あ

る活動に私たちは学ぶ必要があるのではない
でしょうか。

参考・引用文献

- Beers, C.W./江畑敬介訳 (1980). わが魂にあ
うまで. 東京: 星和書店.
- Bendine, E. (1991). Past and Present:
Champion of the Helpless in Our Midst.
Hospital Practice, 26(1), 139-154.
- Brown, T.J. (1998). Dorothea Lynde Dix
New England Reformer, 118-450,
Cambridge: Harvard University Press.
- Colman, P. (1992). Breaking the Chains The
Crusade Dorothea Lynde Dix, 37-135,
NY: ASJA Press.
- Dix, D.L. (2001). On Behalf of the Insane
Poor Selected Papers. 3-32, Honolulu:
Hawaii University Press of the Pacific.
- Dix, D.L. (1843). "I Tell What I Have Seen"
-The Reports of Asylum Reformer
Dorothea Dix-. Amer. J. Public Health
(2000), 96(4), 622-624.
- Gold, L.H. (2005). American Psychiatric
Association Honors Dorothea Dix with
First Posthumous Fellowship. *Psychiatric
Services*, 56(4), 502.
- Gollaher, D. (1995). Voice For The Mad,
The Life of Dorothea Dix. 115-450, The
Free Press.
- グレゴリ・ジルボーグ/神谷美恵子訳 (1973).
医学的心理学史. 277-278, 297-298, 312, 東
京: みすず書房.
- Haas L.F. (1994). Neurological Stamp
Dorothea Lynde Dix (1802-87). *J Neurol.
Neurosurg. Psychiatry*, 57(12), 1465.
- 石井研堂 (1969). 瘋癲病院の始. 明治文化全
集別巻明治事物起源. 1140-1141, 東京: 日
本評論社.
- Krosnick, A. (2003). Drothea Lynde Dix,
"My First-Born Child". *New Jersey
Medicine*, 100(12), 39-41.
- 小峯和茂 (1999). 明治から昭和期における精
神病院史, 臨床精神医学講座 S1, 精神医療
の歴史. 311, 東京: 中山書店.
- 京都府医師会 (1980). 第2章第6節京都癲狂院,
京都の医学史. 825-851, 京都: 思文閣出版.
- Nightingale, F./湯槇ます, 薄井坦子, 小玉香
津子, 田村真, 他訳 (1989). 女性による陸軍
病院の看護 (1858), ナイチンゲール著作集
第1巻. 69-138, 東京: 現代社.
- Nightingale, F., 湯槇ます, 薄井坦子, 小玉香
津子, 田村真他訳 (1989), 看護覚え書
(1860), ナイチンゲール著作集第1巻, 139-
363, 1989, 現代社, 東京
- Norbury, F.B. (1988). A Pioneer in Mental
Health Care Dorothea Lynde Dix. *Illinois
Medical Journal*, 173(5), 325-328.
- Muckenhaupt, M. (2003). Dorothea Dix
Advocate Mental Health Care. 40-119,
New York: Oxford University Press.
- 小俣和一郎 (2000). 精神病院の起源 近代編.
19, 東京: 太田出版.
- 小野尚香 (1994). 精神衛生のあけぼの. 保健
婦雑誌, 50(3), 240-243.
- 小野尚香 (1994). 「癲狂院」の医学的背景. 保
健婦雑誌, 50(4), 326-329.
- Parry, M.S. (2006). Voices from the Past
Dorothea Lynde Dix (1802-1887). *Amer.
J. Public Health*, 96(4), 624-625.
- Reik, L.E. (1952). Historical Notes on
Dorothea Lynde Dix (1802-1887). 208-209.
- Rolka G.M. (1994). 100 Women Who Shaped
World History. 43, San Francisco:
Bluewood Books.
- 佐々木秀美 (2004). 明治時代におけるわが国
の近代的精神医療の萌芽と挫折に関する歴
史的考察—精神病院設立経緯と精神障害者
看護に焦点を当てて—. *看護学統合研究*, 6
(1), 1-15.

- Scheichert, E. (1991). *The Life of Dorothea Dix*. Minneapolis: Twenty-First Century Books.
- Shampo, M.A. & Kyle, R.A. (1988). Dorothea Lynde Dix: Ardent Reformeer. *Mayo Clinic Proc*, 61 (12).
- Shattel, M., Stuart, G.W. (2013). Policy and Advocacy in Mental Health Care, Principles and Practice of Psychiatric Nursing (10th ed). 127-137, Amsterdam: Elsevier.
- 多尾清子 (1991). 統計学者としてのナイチンゲール. 32-36, 東京: 医学書院.
- Tiffany, F. (1891). *Life of Dorothea Lynde Dix*. 73-388, Boston and NY: Houghton Mifflin and Company.
- 浦野シマ, 鈴木芳次 (1977). ドロシア・ディックスと近代日本の精神病院の淵源—重要文献の発見. *看護*, 29(5), 131-140.
- 浦野シマ (1982). *日本精神科看護史35*. 東京: 牧野出版.
- Viney, W. & Bartsch, K. (1984). Dorothea Lynde Dix: Positive or Negative Influence on the Development of Treatment for the Mentally Ill. *The Social Science J.*, 21 (2), 71-82.
- Wilson, D.C. (1975). *Stranger and Traveler The Story of Dorothea Lynde Dix*. 93-342, New York: Little Brown and Company.
- 依田和美 (1995). アメリカにおける近代看護の始まりと発展基盤の確立まで. *Quality Nursing*, 1 (12), 53-59.